

2022年度 北星学園附属高等学校に関する第三者評価

はじめに

本校は、評価（第三者評価）は、私学マネジメント協会の会員校として、系列のコアネット教育総合研究所研究所 副所長 川畑浩之氏を評価委員に委嘱している。私学マネジメント協会主催の研修会（オンラインも含む）と、年間数回の管理職（学校長）との面談で報告とアドバイスを委託した。以下、氏のレポートを抜粋して報告とする。

1. 2022年度の特徴

2017年度より「ICT教育推進」を行ってきたが、理解を得るまでに時間がかかった。本格的に2019年度に通信環境インフラも含めて、ICT環境整備を行ってきた。時間がかかるが教職員の理解を得ながら進めてきたことは、間違いはなかった。その成果もあり、GIGAスクール構想には道内の私立学校でも遅れを取らない設備を整えているが、時代はすでに次のフェーズに入っている。校務のDX化の推進、新たな授業創造など、ノウハウは若手教員を中心に行っている。中堅、ベテラン教員も果敢にチャレンジしているが、若干の温度差があることは否めない。これは他校でも同じ現象が起こっている。慣れていくことと、研鑽していくことしかない。

2022年度も入学生徒数を上回ったことは、受験生から魅力ある学校として評価してもらっていると捉えることができるだろう。校長のリーダーシップのもと、在校生の満足度の維持、全教職員で独自性を構築し発信してきたことの成果でもある。しかし、定員充足が続いていることにより、当時の戦略的な発想については、全教職員が共有できているかどうかを確認しなければならない。熱意のある教員集団ではあるが、組織としての役割、コンプライアンスの遵守、ガバナンス体制を意識しなければ、「働き方改革」とは別に、非常に効率の悪い循環に陥ってしまう恐れがあり改善が必要であると感じる。この点は今後の課題である。

2. 各種アンケートの結果

数年前より入学者を対象とした「アンケート」を実施し分析している。多様な期待を持った生徒が入学している。コロナ禍においては、人間関係の構築ができぬまま、課外活動が中止や縮小となってしまった。開校60周年の記念事業において、総合グラウンドの人工芝化を通して、屋体での学校祭、体育大会を実施し、活動を止めない工夫を行えたことは評価できる。当然ながら、学園の理事会の柔軟性のある発案と財政の支援があったことは素晴らしいことである。

また年齢の若い教員、活用に意欲的な教員の採用が進んでいる。定期的に生徒に対して心身の状況を把握するためのアンケートを行い、できる限りのサポートを模索しようとしている取り組みにさらなる発展を期待したい。

3. 学習指導、進路指導について

昨年と同様、男女共に英語や基礎学力の指導など、きめ細かな指導を期待していると言えよう。英語の少人数展開授業の実施などを通して、英語検定など外部試験の合格者が上昇している。系列校の北星学園大学の文学部英文学科への進学者が増えた一方、短大の英文学科への進学者は減った。また、学力のある生徒が道内の他私学に進学するケースもあり、北星学園大学の魅力の発信の強化が一層、必要とされる。

特進コースのみならず進学コースも含めて、国公立大学へ合格者を生み出した。幅広い学力層に対応できるように、中間層が目標とする進学先を実現できるように工夫をされることを期待したい。一部のクラスでは、勉強をした生徒が、賑やかな生徒によって学習する機会を奪われるような現象があったようだ。これは前述した課外活動の縮小によって、自己表現できる機会が少なくなった生徒の発散の場であるとも考えられるが、学習環境においては、クラスの中で最低限の秩序作りをクラス担当者を中心に構築しなければならなかっただろう。

4. 期待される教育を創造し実践するための取り組み

キャリア教育の一環として「探究」の学習活動を推進しており、魅力のひとつである。コロナ禍前に行ってきた 2 年次に行う総合学習の海外コースの、事前学習から事後学習が組み立てられなかった。しかし ICT を活用して、プレゼンの作成や、新しい学力観に基づく教育を推進してきた。今後、外部への研修の参加等を通して、「新しい学力観」に基づく「新しい授業」を実践することを目的として、教職員のスキルアップを行うことを期待したい。一部の教員は、オンライン講習を積極的に活用して研鑽をしている点が評価できる取り組みである。

職場での情報共有や働き方改革の一環として、全教職員に学園から統一したタブレット PC が配布され、2022 年度の夏の研修会から、Teams を使用した会議資料のペーパーレス化が進んだ。更なる DX 化の推進を期待したい。

5. 「校長による学校評価」を受けてのさらなる提言

伝統を否定せずに、大切にしてきたものを継承しつつ、保守的なシステムの改変を進めようとしている努力は評価できる。校長としての 3 期目となったが、数々の予期せぬ事柄に対して、学校管理職（教頭、事務長）と協力し、迅速に対応して取り組めた点は評価できる。

コロナ感染の緩和によって、クラブ活動を中心にした学校作りから、クラブ活動も含めて、教科指導、ホームルーム 指導、学校行事、総合的な学習、キリスト教活動などを通して教育を構築していこうという一貫した姿勢が、全体に浸透することができるならば、もっと大きな前進になることを期待する。組織的な改善活動ができることを期待したい。

最後に私は、3 月末を持ってコアネット教育総合研究所を退職し、独立した教育コンサルタント会社、有限会社「Edu 企画」としてスタートする。引き続き支援していきたいと願っている。

(コアネット教育総合研究所 川畑浩之)